

人間環境学部

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

人間環境学部は、大学の3つのミッションであるうちの1つ「持続可能な地球社会の構築」を先導すべき使命を帯びているという自覚から目指すべき方向性を打ち出し、学部長期構想の策定によって理念・目的を明確にしており、学部の発展が大いに期待される。

質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学習支援、社会連携・社会貢献に関する各項目は総じて良好であり適切に運営されている。特に学習支援、学生の受け入れに関しては、少人数制の社会人RSP(リフレッシュステージプログラム)の開設など英語学位プログラム(SCOPE)を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応を組織的に組み入れていることは高く評価できる。

今後は、学習成果の把握・可視化に関する指標の開発の検討を継続するとともに、学習支援体制の充実や新たな外部団体・組織との連携の締結などを推し進め、特定の分野に収まらない文理融合の学部教育を追求、整備されることを期待する。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2019年度は、おおむね年度目標に沿ったとりくみを行うことができた。2020年度入試において、一般入試・特別入試ともに、長期構想に照らして良好な兆しといえる結果が出ているのは、とりくみのバロメーターとして自己評価できると思われる。今年度も、長期構想「人間環境学部 2030～for our sustainable future」および中期目標に準拠して、継続的なとりくみを進める。

特に2019年度に少額広報予算を利用して着手した、高校生・高校教員向けの高大接続教育貢献の試み「SDGs出張授業(および学内での関連セミナー)」企画は、反応が上々である。この企画は、学部の理念の強化、組織的なFD活動、社会貢献、と幾つもの効用を持つ、学部のブランディングに資する新事業である。社会人(RSP=リフレッシュステージプログラム)やSCOPE(英語学位コース)ほか、比較的小さな学部のわりには多様性をもつ入試経路を活かすとりくみも、学習支援体制への目配りとともに継続する。

ただし、これら長期構想のリーディングプロジェクトに沿ったとりくみが、執行部や特定の教員の過負担にならないよう、限られたマンパワーを、やり甲斐の維持とともに持続可能な活力にする工夫も総合的に必要であり、喫緊の課題であるといえる。このため、この課題に関するとりくみ(「ディーセントワークプロジェクト」)も並行して開始する。

そして中期計画として、定量的なものさしにとどまらない、学部の特色に沿った「学習成果」把握のための、パフォーマンス評価のものさし(ゼミにおけるルーブリック等)の開発に着手したい

なお、以上は平常時を想定した記述であり、今年度は新型コロナウイルス感染症対応のため、様々な制約を受けることを余儀なくされる。新型コロナウイルス対応に特化した今年度の計画は、別紙の「年度目標」の表を参照されたい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

人間環境学部において、2019年度は概ね年度目標に沿った取り組みが行われ、2020年度入試において一般入試・特別入試ともに、志願者数が安定して増加傾向にあるなど、長期構想に照らして良好な兆しが見えており、2020年度も長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」及び中期目標に準拠した取り組みが継続されることを期待したい。

社会貢献・社会連携として、高大接続教育貢献の試みである「SDGs出張授業(及び学内での関連セミナー)」を新事業として実施したことは、学部のブランディングに資する点からも評価できる。また、社会人RSPや英語学位プログラム(SCOPE)を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応など、多様性をもつ入試経路を活かす取り組みが継続されており、高く評価できる。

学習成果の把握に関しては、学部の特色に沿うパフォーマンス評価の物差しの開発に着手したいとのことであり、その取り組みに期待したい。

このような長期構想のリーディング・プロジェクトに沿った多くの取り組みが執行部や特定の教員の過負担を招かぬために、新たな取り組み(ディーセントワーク・プロジェクト)が開始されるので、今後の経過を注視したい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S A B
<p>※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。</p> <p>学部の専門科目を、カリキュラムポリシーに基づいて体系立て、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。「学際性」のコンセプトは、特に5つのコース制に反映されている。</p> <p>また、「学際性」と一体の「社会との交流・連携」のコンセプトを代表する看板科目「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」に加えて、2017年度にPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」を開講した。キャリアチャレンジは、2019年度は海外プログラムを含めて引き続き7コースを開設し、持続的な実施に向けて継続した。これら「フィールドスタディ」と「人間環境セミナー」、「キャリアチャレンジ」を2014年度入学生から選択必修科目（合計6単位以上修得）とし、学部生全員に対して、学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。</p> <p>また、「研究会修了論文」に加えて、「研究会（ゼミ）」に所属していない学生向けに「コース修了論文」も2016年度から設置し、すべての学生に対して「卒業論文」に該当する単位を修得できるように制度変更を行い引き続きその浸透をはかっている。</p> <p>さらに、グローバル化に対応する能力を涵養するため、「Study Abroad (SA)」プログラムを2016年度から設置し、海外短期留学を可能とした。同時に2016年度に開講した英語学位プログラム (SCOPE) 学生との共創の場として、2018年度には「Co-Creative Workshop」を設置し、英語でアクティブラーニングを実施する機会を創設した。</p> <p>加えて、2019年度に一般学生とは別学則の社会人学生用「RSP (リフレッシュ・ステージ・プログラム)」を開設した。RSPプログラムの授業のほとんどは一般学生用の既存のカリキュラムを共用することにしつつ、履修制度のフレームワークは、18歳入学生とは異なり、既に人生経験の厚みを持つ社会人個々のニーズにあわせて柔軟に組み立てられる、自由度の高いカリキュラムとした。このため、卒業所要単位や転編入学生の進級要件等については、社会人が学びやすきよう便宜がはかられており、RSP用の新設科目としてRSP専用Bゼミ、ファシリテーション論等も開設し、2020年度にはRSP専用Bゼミの増加も予定している。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・RSPの開設と運用 	
<p>【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度 人間環境学部 履修の手引き (web) ・2019年度 社会人リフレッシュ・ステージ・プログラム (RSP) の開設ホームページ https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/program/rsp/ 	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>カリキュラム上、教養科目 (ILAC 科目) と学部専門科目は適切に配置され、それぞれにおける必修/選択必修等の位置付けがなされている。それらの順次性・体系性はナンバリングおよびカリキュラムツリー・マップを利用して可視化されている。</p> <p>学部専門科目の学びにおいては、コース制がそのコアとなる。コースの趣旨及び教育目標をより明確なものにするため、2015年度にその編成について検討を行い、コース名を変更した (サステナブル経済・経営コース、ローカル・サステナビリティコース、グローバル・サステナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース)。2016年度入学生から、2年次進級時に全学生を各コースに所属させた上で、コースコア科目 (10科目 20単位) を選択必修とした。また、学際的な学びを担保させるために、コース共通科目 (5科目 10単位) も選択必修とした。この新たな履修制度は、運用から4年が経過し、学生に十分な浸透が測られている。さらに、選択必修科目である「人間環境セミナー」は従来土曜日に開講していたが、選択必修化と多様な学生ニーズに対応するために、2016年度以降は平日夜間にも開講し、それを継続している。</p> <p>社会人RSP (リフレッシュ・ステージ・プログラム) は、前項にも記したように、上記の一般学生とは異なる、別学則による履修制度を適用して2019年度にスタートした。卒業所要単位124以上 (一般学生は130以上)、ILAC科目36単位以上 (一般40以上) で1外国語選択、「リテラシー科目」2単位以上で「人間環境学への招待」「基礎演習」は必修とはせ</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>ず選択科目、「社会連携科目」(FS、人間環境セミナー、キャリアチャレンジ) 2 単位以上、そしてコース制登録とそれに伴う必修選択は不要とし、学際的な履修計画の道しるべとして参考にしてもらうこととするなど、教員が順次生・段階性をふまえた履修指導を行いつつも、学生の主体的な選択が可能な、自由度の高いカリキュラム提供を実現した。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ RSP の開設と運用 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2020 年度 人間環境学部 履修の手引き (web) ・ 人間環境学部 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/) 	
<p>③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>「持続可能性」について学ぶためには、学際的なアプローチが必要不可欠であるため、自分が選択する「軸」(2 年次からのコース選択、ゼミ選択による専門性) に有機的に結びつける幅広い知識と総合的な判断力を涵養することが、教育課程の編成の基本である。このポリシーには、学部創設の母体となった旧第二教養部の教養カリキュラムがベースとして活かされており、社会科学系を主体としながらも、人文科学系の「人間・文化コース」、また自然科学系の「環境サイエンスコース」も立てており、文理融合の幅広い講義科目群をそなえている。</p> <p>レギュラーの講義科目に加えて、変化する時代や環境に応じたトピックスを時限的に扱えるように、「人間環境特論」という科目も設けて、副題を付けて活用している (2019 年度は 3 科目開講)。</p> <p>そして教室における机上の学習にとどまらず、実社会における、多様な人々との「協働」の能力を実践的に涵養する機会として、社会の現場における実習科目「フィールドスタディ」(国内外) や、社会の窓口たる「人間環境セミナー」などの社会連携科目を設けている。加えて 2017 年度からは、フィールドスタディの発展型として、自治体や地域の活動団体と提携したインターンシップ型の「キャリアチャレンジ」を導入し、学生が現実の社会により深く身を置く学びの機会の充実を図っている。</p> <p>加えて 2019 年度よりスタートした社会人 RSP (リフレッシュ・ステージ・プログラム) においても、学生の主体的を重んじ、幅広く学際的に学べる自由度の高いカリキュラムを提供した。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ RSP の開設と運用 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学部の理念／教育目標 (2020 年度 人間環境学部履修の手引き) (web) ・ 2020 年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) (web) ・ 人間環境学部 HP コース紹介 (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/) ・ 社会人 RSP 紹介 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/program/rsp/) 	
<p>④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>初年度教育は二つの柱からなっている。一つ目としては、①人間環境学部での勉学の方向づけ、②人間環境学のアプローチの多様性を学ぶことを目標とする「人間環境学への招待」を必修科目として春学期に設置している。二つ目には、秋学期に少人数制／担任制の必修科目「基礎演習」を設置し、種々のリテラシー教育、学生としての勉学／生活の進め方の指導を行い、初年次教育の通年の継続性を構築している。2015 年度からは社会人学生専用の「基礎演習」を設置した。また、1 年次の夏休みから「フィールドスタディ」を履修できるようにし、PBL を初年次教育から採り入れている。</p> <p>2019 年度は、これらのカリキュラムをより持続的に運営するとともに、一連の初年次教育の今後の望ましい在り方を検討するための「初年次教育検討委員会」を新たに設けて議論を開始し、2020 年度の「人間環境学への招待」への反映に向けた具体的検討などを行った。</p> <p>高大接続への配慮としては、例えば理科系分野のリメディアルの要素も兼ね備えた科目として、「サイエンスカフェ」が設置されている。また 2016 年度からは従来秋学期の「基礎演習」において行われていた、大学での勉学に必要な基礎的リテラシー教育 (リーディングとライティングの基礎) を、春学期の「人間環境学への招待」に移設し、よりスムーズな大学教育への接続を可能とするよう配慮している。</p> <p>また少額広報予算を利用し、高校生・高校教員向けの高大接続教育貢献の試み「SDG s 出張授業」企画を 2019 年度に着手した。2019 年度は 3 つの高校と高校生対象の塾において 8 回の授業を実施し、2020 年度も既に複数の高校で実施するこ</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

とが決められている。この試みは、高校時代において持続可能な社会に関わる問題意識の契機を提供し、大学に進学してより学際的・専門的な学びに接続する高い効果が期待され、今後も引き続き取り組んでいく予定である。

なお、今年度から開設した社会人 RSP（リフレッシュステージプログラム）では、1.1②項に記したとおり、上記「人間環境学への招待」「基礎演習」は必修とはせず選択科目と位置づけている。18歳学生の初年次教育とはニーズが異なるためである。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・初年次教育検討委員会の新設
- ・SDGs 高大接続教育 FSR（出張授業等）の着手

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2020年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）
- ・初年次教育検討委員会の設置（教授会資料）
- ・SDGs 出張授業企画（高大接続教育 FSR）に係る実施状況（教授会資料）

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

「グローバル教育推進」は、学部の長期構想「人間環境学部 2030」においてもリーディングプロジェクトの一つに挙げられている。

カリキュラムにおいては、グローバル・サステナビリティコースを設置して、学生の国際性を涵養するための教育課程／科目群をより明確にしている。なおコース制においては、自らが所属しないコースの科目も履修可能であり、国際性を涵養する科目はすべての学生に開かれている。SGUに伴い全学で設置されたグローバルオープン科目も、自由科目の枠内で（卒業所要単位として）受講が可能である。

他には、①「海外フィールドスタディ」、②SAプログラムがある。①は年間3、4コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供しているが、随時、海外事情の変化に対して学生の安全に留意し、コースの見直しを行っている。また多くの学生に参加機会を提供するため、海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する旅費の補助を行っている。②は2016年度に新設された短期海外留学機会の提供である。これについても奨学金による補助を行っており、広く学生に参加を呼びかける体制を整え、2017年度秋学期から実際の派遣を開始している。

語学教育では、専門科目内のリテラシー科目として、「アクティブ語学（英語）」と「テーマ別英語」を開講している。「アクティブ語学」では、初級会話・中級会話・上級会話・ビジネス会話と、レベル別および目的別に授業を展開し、学生の発信型英語コミュニケーション能力の向上に寄与している。「テーマ別英語」では、学部の専門分野と関わりの深いテーマを英語で講義・ディスカッションを行なうなど、学問的内容の学習と語学力の涵養を同時に目ざす融合型アプローチを実践している。

2016年度秋学期から開設された英語学位プログラム（SCOPE）は、本学のSGUの重要な部分を担う事業であり、入学者アンケートでも高い評価を受けている。このSCOPEに設置された、「Co-Creative Workshop」において、留学生とともに英語でアクティブラーニングに取り組む機会が提供されていることは特筆に値する。SCOPE科目はESOP生にも随時受講されており、経営学部のGBPとともに、本大学におけるSCOPEの存在意義はきわめて大きいと自己評価できる。

2019年度は新規に4つのSCOPE科目を開講するとともに、卒業論文（Thesis）を新設し（2020年度より運用）、カリキュラムの充実をはかった。

以上の、学部におけるグローバル教育の体系を示すグローバルツリー（カリキュラムツリー）の作成について、2019年度に検討に着手した。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・4つのSCOPE科目を新規開講
- ・グローバルツリー（カリキュラムツリー）の作成に着手
以下、「新規取り組み」ではないが、注目される成果をあげる。
- ・SCOPE志願者数 22名／入学者数9名（2019年9月入学者）
- ・SCOPE生／一般学生の共同科目（「Co-creative Workshop」）のべ参加者数48名（SCOPE生28名／一般学生20名）
- ・2019年度海外FS参加者46名、SA派遣者数7名
- ・派遣留学／認定派遣留学生は、ほぼ毎年数名が出発あるいは帰国している。また、（自主）留学のための休学者は、昨年度19名を数えた。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金規程 ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金取扱細則 ・SAプログラム説明会資料 ・人間環境学部 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/) ・2019年度秋学期入学者アンケート（大学評価室） 	
<p>⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>キャリア教育に関しては、ILAC科目ゼロ群に置かれた全学共通の公開科目である「キャリア教育プログラム」科目の利用のほか、学部独自の提供として以下の内容を挙げることができる。</p> <p>本学部は基本理念の一つに「社会との交流・連携」を掲げており、現地実習プログラム「フィールドスタディ」や、社会の窓口といえる「人間環境セミナー」は、選択必修科目として学部の代表的な看板科目となっている。これらは、おのずと社会人基礎力修養の場となる。2017年度からはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく、インターンシップ型の「キャリアチャレンジ」を開講した。</p> <p>初年次必修科目の「人間環境学への招待」でも、キャリア教育の導入教育を実施しており、上記ILAC科目のキャリア教育科目とは別に、学部専門科目で英語による「キャリア入門」という授業も開設している。</p> <p>また、2年次から多くの学生が参加する「研究会」（ゼミ）の中には、交流のある地域を訪問して体験・実践活動をする合宿を催行するゼミや、企業の実地調査訪問研究を行うゼミ、自治体との連携活動（CES：千代田エコシステム）を内容とするゼミ、「自治体職員をめざすための研究会」と称するゼミなど、社会連携・貢献の性格が豊かな研究会も少なくない。このように、学部の理念とカリキュラム体系の特性を活用した総合的なキャリア教育の実施を進めている。</p> <p>加えて2019年度は、学部が同窓会の協力を得て、卒業生及び就活を終えた4年生が自らの経験を学生に伝えるイベントを2回開催し、社会での実務経験や就活で得たノウハウを共有することを通して、キャリア教育の推進をはかる試みを実施した。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同窓会と連携し、学生に向けて社会での実務経験や就活で得たノウハウを共有するイベントを2回開催 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人間環境学部のキャリア教育」＜ESDによるT字型人材&U字型人材の育成＞（学部HPの「人間環境学部について」のページに掲載 https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/career/shushoku/） ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き。 ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） ・卒業生等と社会経験などを共有するイベント開催のチラシ 	
<p>1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。</p>	
<p>①学生の履修指導を適切に行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次教育では、入学時のオリエンテーション・ガイダンスに加えて、必修科目である「人間環境学への招待」（春学期）及び「基礎演習」（秋学期）を通じて、全員に導入的な履修指導を実施している。 ・「人間環境学への招待」では、授業構成がコース制（2年次～）のイントロダクションになるように計画されており、コース毎に担当教員を配置している。 ・「研究会」（2年次～）や「フィールドスタディ」（1年次から履修可）などについては、募集の時期に説明会やガイダンスを実施し、学生の履修意欲の向上に努めている。特に「研究会」は、募集の時期となる秋学期に、それにあわせて「基礎演習」での説明や研究会ガイダンスを行い、コース制との有機的なつながりに力点をおいた説明を実施している。 ・オフィスアワーを設け、学生個々の履修相談にいつでも応じられる体制をとっている。 ・コース別の科目の履修状況について、データで確認をしている。 ・2015年度に履修指導体制を再検討し、留学生および社会人学生の新入生（編入学含む）に対するガイダンスを実施することにし、2016年から実施した。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・社会人 RSP (リフレッシュステージプログラム) 用に、「コミュニティ」づくりを期して RSP 専用の Bゼミを設けて参加を奨励し、個別の履修指導・助言を行っている。また、「社会人コンシェルジュ」という相談・助言役を設けている。2020年度は RSP 専用の Bゼミをさらに増やすこととしている。 ・2020 年度より履修登録を春学期始めの年 1 回とすることで、一年間を俯瞰した履修計画の立案を促す取り組みを進めた。 	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・履修登録方法の見直し 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019 年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) ・コース別履修状況 ・「人間環境学への招待」講義概要 ・「研究会」、「フィールドスタディ」説明会関連資料 ・新入生ガイダンス資料 	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>初年次教育の「人間環境学への招待」(春学期必修)では、大学教育における講義の受け方、ノートテイキングの方法などを講義している。2016 年度からは、1 年次春学期の講義や学期末試験における論述答案に対応すべく、リーディング・ライティングスキルの基礎についても指導してきている。なお同科目が、学部のカリキュラムのコアとなる「コース制」の導入教育にあたる内容を具えていることは、前項に記した通りである。</p> <p>続いて初年次秋学期の必修科目「基礎演習」では、基本的なリテラシーに加えて、学生自らが学習する態度を身につけるノウハウを教授し、少人数教育を経験させ、本学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させている。本学部では、専任教員は最低 1 つの「研究会 A (通年)」(2~4 年までが継続参加する少人数教育)を担当し、卒業論文にあたる「研究会修了論文」の指導を行っている。なお、ゼミに所属しない学生に対して、卒業論文に相当する「コース修了論文」を執筆できる制度を 2016 年度より導入した。</p> <p>その他、オフィスアワーの時間を中心として、履修やカリキュラムに関する質問等、学習の方法に関する学生の質問に応じる体制がある。また、学習指導委員、留学生アドバイザー、社会人コンシェルジュを設けて学生の求めに応じて教員が助言する体制も備え随時実施している。社会人入学者に対しては、ラーニングサポーター制度を活用して、在学生在が履修に関するアドバイスをを行う場も設けた。</p> <p>学務においても職員が随時丁寧な学習指導のサポートを実施してくれている。さらに成績不振者に対しては全員に面談の連絡を行い、14 名に対して個別面談を実施するなど、履修/学習上の問題解決に取り組んでいる。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラーニングサポーターの活用 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019 年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) ・ラーニングサポーター報告書 ・成績不審者面談記録 	
③学生の学習時間 (予習・復習) を確保するための方策を行なっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>すべての授業において授業外で行うべき学習活動 (準備学習等) が指示されており、その内容はシラバスによって周知されている。少人数教育である「研究会」では、学生が予習・復習を行ってこることが前提となっており、「研究会」の中には、サブゼミを開設している場合も多い。これら正規の研究会以外の時間において、学習 (予習・復習) を行うことに対して、担当教員が適宜、指導をしている。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) 	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※簡条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「フィールドスタディ」はPBLを実践する授業である。学部設立時から学部の特色ある科目として、重点的に取り組んでいる。 ・「研究会」においても、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって、アクティブラーニングが実践されている。上記「フィールドスタディ」に準ずる地域の現場体験・実践の内容をもつゼミ宿泊や企業訪問・調査活動を行なっている研究会も少なくない。 ・「SAプログラム」においては、短期集中型の語学教育／異文化理解教育を実践している。 ・フィールドスタディの発展プログラムであるインターンシップ型の「キャリアチャレンジ」においては、より深く実社会でのPBLに参画する機会が提供されている。 ・「Co-Creative Workshop」においては、文化を異にする留学生と、英語を通じたアクティブラーニングを実践する機会が提供されている。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） 	
<p>⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。</p>	S A B
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「研究会」「フィールドスタディ」「キャリアチャレンジ」などPBLやアクティブラーニングを実施する授業においては、定員を設け、学生の授業への積極的な参加を確保しつつより深い学びへと誘導する配慮を行っている。 ・初年次秋学期の必修科目である「基礎演習」においては、関心コースの希望を基に、1クラスが15～18名となるよう振り分けて少人数授業を実現している。 ・語学授業についても定員を設け、学生の授業参加／発言の機会を確保し、語学能力の獲得に適した環境の整備をはかっている。英語の必修クラスにおいても、授業規準人数を24名とし、授業環境の確保に配慮している。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・2019年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） 	
<p>1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。</p>	
<p>①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。</p>	S A B
<p>【確認体制および方法】 ※簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価は基本的に担当教員の裁量事項であるが、SからD、Eまでの評価割合は学部執行部として把握している。とくにSの割合については、大学の基準を周知している。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
<p>②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。</p>	S A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>学部別に集計されたGPCAと全学のGPCAを教授会構成員に周知している。さらに、試験における不正行為を防止するために、定期試験における参照物についての申し合わせ事項を策定している。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録（2019年7月17日開催（2018年度秋学期分）、2020年3月25日開催（2019年度春学期分）） ・定期試験における参照物の取扱について 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告があった学生に限定されるが、実績は把握している。 ・4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部パンフレット HP (https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-9) 	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員 ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料 ・データの種類：成績優秀者の分布、進級状況など <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録（2019年7月17日開催、2019年9月18日開催、2020年2月19日開催、2020年3月25日開催） 	
②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年7月に学部のアセスメントポリシーを定め、公表した。アセスメントポリシーでは入学段階、初年次教育段階、2年次以降の教育段階、そして卒業段階の4つの段階に分けてそれぞれ測定の考え方を示した。入学段階では入試における選考を、初年次教育段階では必修科目である「人間環境学への招待」と「基礎演習」を、2年次以降の教育段階では研究会やコース選択、社会との交流・連携に関わる科目（「人間環境セミナー」「フィールドスタディ」「キャリアチャレンジ」）並びにグローバル関連科目を、卒業段階では「研究会修了論文」及び「コース修了論文」を主な指標として、それぞれの成績や3つのポリシーが求める能力の評価を試みた。 ・当学部は文系・理系も含め特定分野の枠におさまらない融合的なカリキュラムを有しているため、統一的な学習成果測定指標の設定は難しい作業であると考えている。しかし、学習成果の把握や測定の重要性は認識しており、アセスメントポリシーに基づく評価の議論・検討を引き続き進めている。 ・一部の科目においては、事前・事後の形で学生自らが自身の成長を把握、評価するような仕組みを導入しており、それらグッドプラクティスを学部として組織的に活用できる方策についても可能性を検討している。 <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントポリシーの策定と公表 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントポリシー：学部 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/policy/assessment/) ・教授会議事録（2019年5月15日開催、2019年6月19日開催、2019年7月17日開催） 	
③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1-4②と同じ。 ・加えて、ゼミに所属する学生については、担当教員が受講態度やレポート、研究会修了論文等で随時、測定している。また2016年度からはゼミに所属していない学生にも卒業論文にあたる「コース修了論文」の執筆が可能となる制度を導入し、「研究会（ゼミナール）」に所属していない学生についても学習成果の把握を可能としている。 ・またSAプログラムに参加した学生に関しては、派遣前後の英語外部試験のスコアを比較し、海外語学研修の成果の把握が可能である。 ・さらに、中期的視点で定量的なものにとどまらない、学部の特色に沿った「学習成果」把握のための、パフォーマンス評価のものさし（例えばゼミにおけるルーブリック等）の開発を視野に、2019年度に検討に着手した。 ・なお、学部全体の傾向を把握するために、大学評価室卒業生アンケートの結果を教授会で確認している。 <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントポリシーの策定と公表 ・学部の特徴を踏まえた評価のものさしの検討着手 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントポリシー：学部 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/policy/assessment/) ・教授会議事録（2019年5月15日開催、2019年6月19日開催、2019年7月17日開催） 	
④学習成果を可視化していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディに関しては広く成果を発信する「フィールドスタディカタログ」を、また課題や対応事例を共有するための「フィールドスタディ報告書」を作成し、「フィールドスタディ」の全コースの実施状況を可視化している。 ・キャリアチャレンジについても、HPにおいて概要と成果を発信している。 ・研究会における「研究会修了論文」の冊子化を行っている。 ・「研究会修了論文」のタイトルを、学部紀要（人間環境論集）および学部 HP で公開している。 	
<p>【2019年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 人間環境学部 履修の手引き ・「フィールドスタディカタログ」、「フィールドスタディ報告書」 ・キャリアチャレンジ HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/kogi/careerchallenge/) ・研究会修了論文集 ・学部紀要（人間環境論集） ・人間環境学部 HP (https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/) 	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>教育過程およびその内容、方法の適切性については、主としてカリキュラム・基本制度委員会において、定期的に点検・評価を行っている。また年度ごとに質保証委員会においても点検・評価を行っている。その他、各種委員会を組織し、初年次教育検討委員会で、人間環境セミナー企画委員会、フィールドスタディ委員会、SCOPE 運営委員会、RSP 運営委員会などにおいて、個々のカリキュラムの視点から検証及び改善等に向けた議論を行い、可能なものから実践してきている。</p> <p>具体的には、例えば以下のような手法・データを用いて検証を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「フィールドスタディ」および「研究会」については応募状況・参加者数を分析し、適切な科目設置の検討を行っている。 ・「研究会修了論文」および「コース修了論文」の執筆者数の把握をしている ・1年次必修科目の「人間環境学への招待」において、入学直後（4月）と春学期終了時（7月）で独自の授業アンケートを行い、入試経路別に人間環境学部の学びに対する姿勢などについての分析を実施し、教育内容・方法の改善をすべく検証を行っている。 <p>また、学生モニターを活用して入試経路、学年、留学生や社会人など、学部を更生する学生の多様性に応じて学習に関わる意見を聞き、改善に結びつける取り組みを行った。2019年度は9名から聞き取りを行った。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種委員会議事録 ・研究会別 研究会修了論文提出率 ・2019年度 人間環境学部 1年次アンケート集計結果 ・2019年度学生モニター制度実施報告書 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※利用方法を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・授業改善アンケート結果の利用は、主に担当教員に委ねられているものの、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・教育課程の編成においては、以下の二つの点が長所・特色と考えている。</p> <p>(1)文理融合の幅広い分野を収める学部カリキュラムであるため、学生の学習成果の向上、学際的な履修を可能とすると同時に、順次性、体系性を明確にするために「コース制」を導入し、学生の履修指導に活用している。</p> <p>(2)種々の社会的要請に応えるべく RSP や SCOPE を含めてカリキュラム及びメニューの多様化・充実化を図ってきた。特に、グローバル化、PBL やアクティブラーニング、キャリア教育、社会連携の分野に関しては、高大接続や卒業生との連携を含め、充実した科目構成を実現している。</p>	<p>1.1. ①②③④</p> <p>1.2 ①②</p> <p>1.1. ⑤⑥</p>

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>学習成果の把握・評価に関して、アセスメントポリシーを策定し、測定の物差しを明示することができたが、学部の特色に沿った具体的なさらなる可視化の方策や新たな指標の設定など、今後さらに議論・検討を継続し深めていく必要がある。</p>	<p>1.4 ②③④</p> <p>1.5 ①</p>

【この基準の大学評価】

人間環境学部では、専門科目をカリキュラムポリシーに基づいて体系立て、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。そして、「学際性」のコンセプトは5つのコース制に反映され、「社会との交流・連携」のコンセプトでは「フィールドスタディ」、「人間環境セミナー」、「キャリアチャレンジ」を選択必修科目と位置付け、学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。また、「コース修了論文」、「Study Abroad (SA)」プログラム、「Co-Creative Workshop」を設置し、2019年度は「RSP 専用Bゼミ」、「ファシリテーション論」等を新設しており、教育課程の編成・実施方針に基づく教育課程・教育内容を適切に提供している。これらの点は高く評価できる。

初年次教育については望ましい在り方を検討する「初年次教育検討委員会」を新設し、高大接続教育貢献の試みとして「SDGs出張授業」を実施しており、初年次教育・高大接続への配慮は適切であると評価できる。

グローバル教育の推進は学部長期構想のリーディングプロジェクトの一つであり、従来の英語科目やプログラムに加え、2019年度はSCOPEに新規に4科目を開講し、「卒業論文(Thesis)」を新設してカリキュラムの充実を図っている。これらは学生が国際性を涵養するための教育内容を適切に提供しており、評価できる。また、2019年度にグローバル教育の体系を示すグローバルツリー(カリキュラムツリー)の作成に着手しており、その完成を待ちたい。

キャリア教育に関しては、全学共通科目のほか、学部独自の科目を開設するなど、学部の理念とカリキュラム体系の特性を活用した総合的なキャリア教育を推進しており、評価できる。さらに、同窓会と連携して開催したイベントは、今年度より始まったものであるが、キャリア教育の推進を図る活動として、今後参加者を増やす工夫を行って継続されることを期待したい。

学習成果の把握・評価に関しては、アセスメントポリシーを策定し、測定の物差しを明示しているが、学部の特色に沿ったさらなる可視化の方策や新たな指標の設定など、今後さらに議論・検討を継続し深めていくことが望まれる。

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【FD 活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。

- ・春学期講義科目（「人間環境学への招待」）における授業相互参観を実施するとともに、フィールドスタディにおいて複数教員で担当することにより、お互い指導方法や内容に関するアドバイスを交換している。そのほか 2019 年度は、新任教員 3 名を含む 6 名 6 科目（基礎演習、研究会、コース基幹科目）において授業相互参観を実施した。なお、シラバス第三者チェックを 11 人の教員で実施したことも効果的な FD の一環であると考えている。
- ・FD 推進センターによる FD 研修を、「授業支援システム」と「剽窃チェックソフト」をテーマとして実施し、25 名の教員中 24 名が参加した（2019 年 7 月 17 日、BT25 階 D 会議室）。
- ・カリキュラム運営及び学生指導において、研究会募集の Web 化、フィールドスタディ募集の Web 化、履修の手引きのデジタル化などの事務改善を実現し、それを通して教員の能力資源の効果的な集中と分散に取り組んだ。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・SDGs 出張授業企画の着手
- ・学部運営に係る事務改善

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・SDGs 出張授業企画（高大接続教育 FSR）に係る実施状況（教授会資料）
- ・2019 年度 授業相互参観実施報告書
- ・教授会資料：FD 研修会の実施（2019 年 7 月 17 日開催）

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。S A B

※取り組みの概要を記入。

本学部は、20 世紀までの専門学部とは異なって、人文・社会・自然科学に亘って多様な専門領域を持つ教員が集まる組織であり、個々が学部の理念・目的を共有し、組織的に学際性を発揮するためには、自分の専門領域とは異なる分野からも刺激を受け、可能な範囲で視野と教育・研究の幅を広げて「協働」の効果をあげられるよう、資質向上に努める必要がある。

そのため、教員個々は、本来の専門分野の研究で精進するのみではなく、「人間環境学会」（学部教員・学生が会員）の機関誌『人間環境論集』で他者の研究内容に目を通したり、有志が共同研究を行ったり（2018 年度には、国際開発学・国際協力・自然環境政策を専門領域とする 3 教員の実施例あり）、同学会のシンポジウムを共同企画・運営したり、教員が外部の組織と連携してシンポジウムを開催したり（2019 年度は海洋プラスチックをテーマとしたシンポジウムを開催）、といった経験を地道に積み上げている。東日本大震災を契機に、大学が社会に対して何を出来るか、という切実な自問意識で始まった、教職員と学生の共同企画による特別セミナー「とにかく考えてみよう」（略称「トニカン」）は、特に新任教員など若手教員が積極的に参画して、2019 年度までで開催は 17 回を数えている。

授業（教育）において、学部の初年次教育としてきわめて重要な必修科目「人間環境学への招待」は、コーディネーターの企画のもとに多くの教員が講義に参加するオムニバス型式をとっており、1 回 1 人の講義ではなく、互いに専門分野を異にする 2 人ないし 3 人の「コラボ」で 1 回の授業を創る取り組みを実施している。また千代田区との事業協力協定に基づく CES（千代田エコシステム）ゼミは 2019 年度には専門の異なる 3 名の教員で運営した。さらに「フィールドスタディ」においても、主担当教員が、サブの引率者としてあえて領域を異にする教員（特に若手教員）と組んで催行する事例も多く、「人間環境セミナー」の企画も同様で、ひとつのテーマに対して専門の異なる複数の教員がコラボする形で企画運営が行われている。

2019 年度は新たな社会連携／貢献の取り組みとして、SDGs 出張授業企画（高大接続教育 FSR）を通して持続可能な社会に関する教育を推進するとともに、2020 年度はその成果を広く情報発信することを検討中である。また同窓会と連携して卒業生と学生とをキャリア教育を通してつなぐ試みを始めたところである。

これらは自ずと、学部教員としての資質向上をめざした FD 活動の意味をもつといえる。このような意識を高めた教員の輪による活動が、本学部らしい研究実績や社会貢献等の活性化を促すと考えられる。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・SDGs 出張授業企画（高大接続教育 FSR）の着手
- ・同窓会と連携した学生と社会人をつなぐイベントを 2 回開催

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・海洋プラスチックをテーマとしたシンポジウム資料
- ・2019 年度「とにかく考えてみよう」資料
- ・「人間環境学への招待」講義概要

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・SDGs 出張授業企画（高大接続教育 FSR）に係る実施状況（教授会資料）
- ・卒業生等と社会経験などを共有するイベント開催のチラシ
- ・教員のアクティビティ例（松本倫明教授が制作に協力したプラネタリウム番組がニューヨークで上映中）：学部 HP
(<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/info/article-20200218102330/>)

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>同じ専門分野の教員は 2 人といないという学部の学際的な教員が織りなす多様な運営組織とカリキュラム展開は、「協働」の豊かな可能性の観点から、既存の学部にはない固有の FD のポテンシャルを秘めた特色を持つと自己評価できる。</p> <p>2019 年度はこの特色に基づく新たな取り組みとして、SDGs 出張授業企画や同窓会との連携による社会性の高い教育の試みの実現でき、社会連携／貢献と高大接続連携など、さらに学部理念のブランディング化に向けた教員組織づくりと、組織的な FD 活動を一步前に進めることができたと言評価される。</p>	2.1 ①②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>学部の特色である多岐にわたるプログラムとカリキュラムをきめ細かく運営し、様々なニーズに対応する業務は極めて煩雑であり、研究と教育以外に割かなければならない調整／事務量も多い。多様な受け皿と教育の実現を持続的に行うためには、常に事務改善をはかり、負担の公平化を考慮しながら実施することが求められ、これをどう実現していくかが課題と言える。</p> <p>今年は特に新型コロナウイルス対応として、「負担の公平化」については平常時以上の工夫が必要である。執行部をはじめとする特定の教員（・学務）に過剰な負担がかかって健康を損ねることはあってはならず、教職員のいのちと健康を守ることを「BCP」の第一としながら、みなで役割分担し、助け合って「ワンチーム」としてこの危機を乗り越えていくという方針を共有し、対処していきたい。</p>	2.1 ①②

【この基準の大学評価】

人間環境学部の FD 活動については、カリキュラム・基本制度委員会において検討がなされ、FD 推進チームを設置して執行部と連携を取りつつ授業相互参観を実施し、複数教員が担当する科目を設けて互いの指導方法や内容についてアドバイスを交換するなど、FD 活動は適切に行われている。また、カリキュラム運営及び学生指導において Web 化やデジタル化などが推進されたことは、事務改善を通して教員の能力資源の効果的な集中と分散を実現する取り組みとして評価できる。研究活動においては、「人間環境学会」の機関誌「人間環境論集」の発行や共同研究、シンポジウムの共同企画・運営、外部組織との連携によるシンポジウムの開催、さらに、教職員と学生の共同企画による特別セミナーの開催など、学部の特徴である学際性を発揮した取り組みが活発に行われている。教員個々が自身の専門分野の領域を越え、研究活動の活性化や資質向上を図る方策が取られており、評価できる。

社会貢献においては、千代田区との事業協力協定に基づく CES ゼミの運営や SDGs 出張授業（高大接続教育 FSR）が実施されており、今後はその成果の可視化に期待したい。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する。
	年度目標	学部ホームページに掲載された理念・目的の修正の要の有無を検討する。
	達成指標	教授会議事録、学部 HP
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
	自己評価	A
	理由	教授会で検討し、特に修正の必要がないことを確認した。
	改善策	—

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
	所見	執行部見解の通りで問題ない。	
	改善のための提言	-	
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	適正な PDCA サイクルの運営を継続する	
	年度目標	PDCA サイクル運営の C (チェック) に重点を置き、執行部や学部事務局への過負荷要因を調査し、組織的に無理のない業務分担のあり方を考えて試行する。	
	達成指標	今年度の「拡大 (合同)」委員会開催記録、次年度各種委員会分担案 (表)	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	2019 年度各種委員会分担はとりあえず 2018 年度の表に準拠して割り当てたが、過負担の軽減および公平化について、重点課題として十分に意識してとりくんだ。次年度も継続してさらなる改善をめざす。	
	改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	次年度への継続課題であり、重点課題として可能な範囲で着手したことには一定の評価ができる。	
	改善のための提言	-	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。	
	年度目標	①SDGs とカリキュラムとの結びつきをより進める、ESD 教育に関わる各種のとりくみを行う。 ②グローバル教育推進に関して、カリキュラムの「グローバルツリー」作成に着手する。 ③社会人 RSP を軌道に乗せる。	
	達成指標	①シラバスににおける SDGs へのリンクについて言及した科目の増加、広報・社会貢献・総合学習等を兼ねた企画に向けた検討 (委員会における企画の記録) ②関連する委員会の作業記録 ③RSP についての学部 HP (新規作成)	
		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A	
	理由	総合的に A 評価。①は S。「教員・教員組織」に関する組織的な FD にあたり、かつ「社会貢献・社会連携」の事業にもあたる新たなとりくみとして、高校との高大接続教育のための「SDG s 模擬授業」企画を作成するとともに試行的な実施を開始した。次年度はこれに加えて、出張授業や大学に高校教員を招いてのセミナー等を行うことになった。②は厳しくいえば、完成していないので B であるが、着手のための協議は行なっている。③は A。RSP 用の web 頁を立ち上げ、広報の体制を整えた。	
	改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	執行部見解はおおむね適切である。①の「SDG s 模擬授業」企画は、確かに組織的 FD の効果や社会貢献の役割も果たし得る優れたとりくみであるが、右記に十分に留意する必要があるだろう。	
	改善のための提言	「SDG s 模擬授業」企画は、特定の教員に負担が集中しないよう、工夫と共有認識が必要である。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。
	年度目標	①学部の理念である「社会連携」を実践するアクティブラーニング、PBL 型科目〔フィールドスタディ、キャリアチャレンジ、研究会等〕を引き続き維持し、充実につとめる。 ②多様な入学経路が全体の活力につながることを念頭に、人間環境倶楽部の活用を含む、一層の交流環境づくりに努める。 ③「人間環境学への招待」の運営・授業に多くの教員が参画し、毎回 2～3 名の教員がコラボ講義を行うなど、多様な専門領域をもつ教員同士の学際的な「協働」を実践するとともに、FD 効果を高める場として活用する。
	達成指標	①アクティブラーニング、PBL 型科目の数の確認 ②関連する企画の記録（またはイベント等開催記録）、教授会議事録 ③2019 年度「人間環境学への招待」教員担当記録
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	総合的に S 評価。①は A。学部の特色ある設置授業として、前年度までと変わらず、科目の継続および内容の改善を意識して取り組んだ。新任教員による FS の新コース追加や、休止していたキャリアチャレンジの再開が、2020 年度カリキュラムに反映される。②は A～S。最も身近な「社会連携」資源である同窓会（学部 OB・OG）との交流という点を重視した催しを行なった。③は S。新たに「初年次教育委員会」を立ち上げ、今まで特定の教員（一人）に過負担がかかっていた運営体制を複数担当に改め、2020 年度に試行的に実施することになった。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	②の、「社会連携資源」としての同窓会との交流活性化というのはその通りであるが、同窓会との折衝が執行部の負担過多にならないよう、各教員が意識を共有する必要がある。③も、コーディネーター 3 人制を試みることになったが、「全員参加」の意識が不可欠であることを改めて再認識すべきであろう。
改善のための提言	—	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	文理融合でありかつ特定の分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。
	年度目標	左記「グッドプラクティス」の発掘等を継続するとともに、4 年次におけるアンケートなどを含む成果指標の検討に着手する。
	達成指標	関連する委員会の審議記録、教授会議事録
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	大学全体に求められている課題に対応して、学習成果に関するアセスメントポリシーを策定した。
年度末報告	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	単年度の、目先の目標に関する自己評価にとどまらず、「この学部で学ぶと何が身につけられるのか」というのが何故課題になるのか、中期的な目標の意味をしっかりと認識したうえで、段階的に取り組んでいくべきである。
改善のための提言	—	
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	2016 年度に策定した入試戦略に基づき、18 歳人口の減少を迎える 2018 年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	①一般入試では、志願者の動向、入学者の成績などの要素を勘案した、高校ターゲット層の選定と効果的な入試広報を実施する。 ②多様な入学経路を本学部の特色として大切に、特に少数枠の SCOPE や RSP について志願者の安定的確保につとめる。	
	達成指標	①広報広聴委員会活動記録、関連する教授会議事録、2020 年入試結果 ②学部 HP における広報の充実、関連運営委員会の広報活動記録、2020 年入試結果	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	年度目標①②とともに、入試経路ごとに十分な配慮を行いつつ選考を行い、またその結果を教授会で周知した。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	執行部見解の通りで問題ない。アドミッション戦略に関わる広報広聴委員会の活動は、高く評価できる。
	改善のための提言	—	
No	評価基準	教員・教員組織	
7	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的な FD 活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。	
	年度目標	①自己点検項目に沿った、個々の委員会のミッション・位置がわかりやすい学部内の各種委員会分担表を作成する。 ②SCOPE 任期付教員に必要な補充人事の準備を進め、2020 年末で退職する専任教員の補充人事の検討に着手する。	
	達成指標	①「内部質保証」に同じ ②人事委員会議事メモ	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	①は、成果としては道半ばであるが、着手はしており、従来より改善された点も複数挙げることができる。次年度にさらなる改善を図る。②は、教授会の議を経て、計画通り進んでいる。その他複数教員による講義・現地学習、及び6つの講義での授業相互参観を通して効果的な FD 活動を実施できた。
改善策		—	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	執行部の課題認識の通りであり、次年度のとりくみでさらなる成果が見込まれるであろう。	
	改善のための提言	負担の公平化は、財務状況の見直しも含めて、複数の観点から総合的にとりくむ必要があり、かつ、その新たなプロジェクト自体が必要以上に仕事を増やすことにならないよう、配慮される必要がある。	
No	評価基準	学生支援	
8	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。	
	年度目標	少数枠である社会人 RSP 学生や SCOPE 生の学習支援、生活支援を一層進めることを含め、学部によるケアのみならず、学習環境支援センターの各種サポート等も利活用した学生支援を推進する。	
	達成指標	ラーニングサポーター制度の利用記録など	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		A	
	理由	社会人 RSP 入学者に対してラーニングサポーター制度を活用した支援を行った。また学生モニター制度を活用し、社会人、留学生、多様な入学経路の学生などから意見・要望等を得て今後支援の充実に生かす事項を把握した。さらに学部に学生支援担当を設けるなど、社会	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			人、SCOPE 生その他の学生に対して随時必要な面談と支援を行った。	
	改善策		—	
	質保証委員会による点検・評価			
	所見		執行部見解の通りで問題ない。	
	改善のための提言		—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
9	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。		
	年度目標	①SDGs をテーマとしたイベント等の企画検討などを進める。 ②フィールドスタディ等で連携協定のある地域・自治体との関係を、一部見直しも含めて継続する。		
	達成指標	①教育課程・教育内容に関することと同じ ②FS、キャリアチャレンジ企画書（募集要項）		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	①はS。「教育課程・学修成果」の①に記した、高大接続教育に資する「SDGs 出張授業（＋セミナー）」企画は、大学の少額広報の採択を受け、2020 年度に実施される部分が多いが、すでに多数の高校からオファーが来ている。社会貢献活動であり、学部の組織的な FD にもなり、学部の教育理念・目標を SDGs の観点から強化できる、「一石二鳥」以上の効果が期待されるとりくみと考えらる。②も、関係していた教員の退職により休止している交流を、近年中に再開すべく、協定の見直しも含めた交渉に着手した。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	①についての懸念点は、「教育課程・学習成果」の項で記したことと同じ。「教員・教員組織」の項で指摘した通り、次年度のとりくみで十分に留意される必要がある。	
		改善のための提言	—	
【重点目標】				
<p>本学部が 2010 年代に積極的に進めてきたカリキュラム改革・新規の事業をふまえ、近未来を見据えて 2017 年 3 月に策定された学部長期構想「人間環境学部 2030」に記された 9 項目のリーディングプロジェクトの中で、執行部や学部事務局に過負担がかからない業務分担の見直しに取り組みつつ、プロジェクトに優先順位をつける。そのうえで、無理のない範囲で、学部の特長を伸ばし、かつ広報にも有効で、FD 活動の意味も持つ企画を試みる。纏めれば、「学部長期構想に基づいたとりくみの安定化」が目標となる。</p>				
【年度目標達成状況総括】				
<p>重点目標に記した 1 文目について、2019 年度は、可能な範囲の、細かな改善の工夫を試みた（業務のスリム化・効率化、負担の公平化のための総合的な業務担当記録の記録ほか）。2 文目については、実施は次年度であるが、上々の手応えを得られたといつてよい。（「教育課程・学習成果」の①および「社会貢献・社会連携」の①の記述）。私たちの学部は、専任教員人数（31 名）の割に入試経路が多く多様な学生の教育に従事しており、学部長期構想「人間環境学部 2030」に書かれたリーディングプロジェクトの数も多い、非常に忙しい学部である。限られたマンパワーおよび学部予算内で、多くのリーディングプロジェクトを無理なく推進していくために必要不可欠であるのが、「執行部や学部事務局に過負担がかからない」業務の見直しであり、執行部のみならず全ての専任教員の負担も対象になる。そこで次年度は、この課題をいっそう意識したとりくみを、(仮称)「ディーセントワーク・プロジェクト」として、既存のリーディングプロジェクトと並行する（同時進行すべき、補完的なとりくみとして）新たなリーディングプロジェクトに位置付ける。ディーセン・トワークとは、「働き甲斐のある、人間らしい仕事」の意である。具体的には、そのプロジェクト名のもとに幾つかのタスクフォース的なチームを作り、改善を検討する。これは、忙しいうえにさらに仕事をふやすことにはならない。「とりくみの安定化」のために、業務を増やさないよう配慮しつつ、中期的な課題としてとりくんでいく。</p>				

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2019 年度目標の達成状況に関する大学評価】

人間環境学部では、学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」に記された理念・目的におけるコアミッションに基づき、明確な方向性が示されており、内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携は、すべてが年度目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。特に教育課程・学習成果における「教育方法に関すること」及び社会貢献・社会連携は、年度目標を十分達成しており、質の向上が顕著である。今後は学部長期構想に基づいた取り組みが安定していくことを期待したい。

IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する。
	年度目標	学部ホームページに掲載された理念・目的の修正の要の有無を検討する。
	達成指標	教授会議事録、学部 HP
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	適正な PDCA サイクルの運営を継続する。
	年度目標	新型コロナウイルス感染症対応が長期化することを想定し、平時の「戦略構想委員会」を土台に、学部内に執行部機能を強化した中枢として「危機管理本部」を設け、学部の BCP を策定する。そして、教職員のいのち・健康を守ることを第一に、昨年に引き続き執行部・学部事務局や特定教員への過負荷を軽減する業務分担のあり方を考える。
	達成指標	▶学部危機管理本部議事録 ▶「ディーセントワーク・プロジェクト」の関連タスクフォース協議記録 ▶2021 年度各種委員会委員表
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。
	年度目標	未曾有の非常時こそ本学部の特色を發揮できる好機と捉え、本学部ならではの話題（例：「災害」への対応、ライフスタイル・価値観の見直し、社会の根本的な変革の可能性など）をオンライン授業に採り入れることに、可能な範囲でとりくみ、学部の教育のポテンシャルを再認識する機会とする。
	達成指標	▶教員個々のオンライン授業実施記録（年度末、ゼミや講義科目において試行した工夫と、「成果」の感触（定性的把握）
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。
	年度目標	・新型コロナウイルス対応の「オンライン授業」について、兼任講師も含めた各教員の情報交換・質疑応答のプラットフォームを web 掲示版として設けつつ、各教員の得意分野を生かした互助による実験的などりくみを共有し、「ワンチーム」で難局に挑んでいくことを、組織的な FD 活動とする。 ・特に初年次教育で重要な 2 つの必修科目「人間環境学への招待」「基礎演習」については、昨年度に合意されている方針を、可能な範囲で実行する。すなわち前者は新たな運営方式、後者は汎用的な共通性の改善など、全員参加の意識で充実に向けてとりくみ、組織的な FD 活動に位置付ける。
	達成指標	▶Web 掲示板 「人環オンライン授業サポートデスク」の投稿記録 ▶「人間環境学への招待」の各回記録、「基礎演習」の統一的な内容に関する合意記録
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	文理融合でありかつ特定の分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。
	年度目標	昨年度に「アセスメントポリシー」を策定したが、今年度は、新型コロナウイルス感染症対

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		応のオンライン授業の試行でどのような「成果」が得られるのかを検証することに、目標を絞りたい。
	達成指標	▶教員個々のオンライン授業実施記録(年度末、ゼミや講義科目において試行した工夫と、「成果」の感触(定性的把握))
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。
	年度目標	①一般入試では、隔年で増減を繰り返すにA方式志願者数の波について、減少年に当たった20年度(2128名)に対して、21年度は微増を目標とする。 ②多様な入学経路を本学部の特色として大切にし、新型コロナ対応による制約を予測しつつ、各経路の志願者の確保に善処する。特に「自己推薦入試」では、特色ある入試経路としての意義を維持すべく、今年度に可能な選抜方法について検討する。
	達成指標	▶2021年度入試結果一覧表 ▶教授会議事録(特別入試関連の議案)
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。
	年度目標	2021年度着任枠2名の専任人事については、新型コロナウイルス感染症対応として、採用活動・着任時期の1年延期等の見直しを行う。
	達成指標	教授会議事録
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。
	年度目標	・大学の学生アシスタントやラーニングサポーター制度を利用して、オンラインによるピアサポート導入を試みる。 ・新型コロナウイルスによる閉塞状況への対応として、学生の「心の支援・救済」も重視し、学部HPにおける励ましの発信や教員個々の授業(学習支援システム)を通じた可能な範囲のコミュニケーションに注力する。
	達成指標	▶学生アシスタント、ラーニングサポーター実施記録 ▶学部HP「学生の皆さんへ」の発信記録
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任(FSR)を果たす。
	年度目標	・昨年度に着手し、「高大接続教育」への協力という点で、学部の特色を活かした社会貢献企画として好感触を得ていたSDGs少額広報事業は、新型コロナウィルス感染症対応で大幅な制約を受けざるを得ないが、HPによる発信や、一部オンライン模擬授業の企画など、可能な範囲で継続したい。 ・東日本大震災直後に、教員有志のとりくみで始まった通称「トニカン(とにかく考えてみよう)」企画が、以後「人間環境学会」の社会連携活動として定着し、現在に至っている実績をふまえ、同様の未曾有の危機に直面して、学部としてどのような社会連携の発信ができるか、人間環境学会による新たな企画を試みる。
	達成指標	▶HPにおける広報関連の発信記録 ▶「オンライン模擬授業」の試行記録 ▶人間環境学会の特別企画記録
<p>【重点目標】 新型コロナウイルス感染症対応のとりくみに尽きる。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 執行部機能を拡大した学部内「危機管理本部」を中枢として、教職員一体のチームワークで、適切な役割分担と情報共有に努めつつ、上記各項目に記した施策を試みる。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

人間環境学部では、学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」で理念・目的について明確な方向性が示されており、それに準拠する形で中期目標・年度目標が設定されており、適切である。

2020 年度は評価基準とする内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携のすべてについて、新型コロナウイルス感染症対応が長期化することを想定した年度目標と具体的な達成指標が掲げられおり、評価できる。また、年度目標を達成するために、適切な役割分担と情報共有に努め、各項目に記した施策を試みるとしたことは適切である。

【大学評価総評】

人間環境学部は、法政大学長期構想「HOSEI2030」が掲げる 1 つのミッションである「持続可能な地球社会の構築」を推進する一翼を担うという自覚から、目指すべき方向性を打ち出した上で学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」(2017 年 3 月 22 日)を策定しており、学部の理念・目的は明確であり、学部の発展が大いに期待される。

内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携における 2019 年度目標の達成度はすべて良好であり、適切に運営されている。特に学習支援と学生の受け入については、社会人 RSP や英語学位プログラム (SCOPE) を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応など、多様性をもつ入試経路を活かす取り組みが継続されており、高く評価できる。また、教育課程・学習成果における教育方法において、多様な専門領域からなる複数の教員が担当する科目を設け、学際的な協働を実践していることは人間環境学部独自の特色が大きく生かされており、評価できる。

今後は、学部の特色に沿った学習成果を把握する新たな指標の開発に着手するとともに、適切な役割分担と情報共有に努めた上で、新型コロナウイルス対応に特化した今年度の全般的計画が適切に実行されることを期待する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。